

(1)

2019.9.7.

おい図書館

No.205

発行
代表
青木 和子
松本市牧の原1-10-416
TEL 047-311-0886

映画

「ニューヨーク公共図書館

エクス・リブリス

世界中の図書館の憧れの的であり、ニューヨーク有数の観光スポット「ニューヨーク・パブリック・ライブラリー」。

「パブリック」の語源はラテン語で「人々」↓「公共」。日本で「おおよけ」「お上」を指す「公立」とは意味が大きく違う。日米では図書館の成り立ちも全く違うようです。

フレデリック・ワイズマン監督は次の様に言っています。

「ニューヨーク公共図書館は市

の文化施設の中で最も重要なものの一つである。その理由は、収蔵されている資料、書籍、映画、演劇、アート、ダンスなどコレクションの豊富さにある。本館を含む92の図書館は、従来の図書館業務に加えて、ビジネス、コンピュータプログラミング、外国語、放課後の教育プログラムや成人教育など、多種多様な講座を提供するコミュニティセンターにもなっている。この図書館は最も民主的な施設であり、すべての人が歓迎されるこの場所では、あらゆる人種、民族、社会階級に属する人々が積極的に図書館ライフに参加している。

「エクス・リブリス」は「くの蔵書より」の意で、この図書館の全てを網羅した訳ではない。』
まだまだ奥が深いようです。
(青木 和子)

映画「ニューヨーク公共図書館」を

鑑賞して

★先日、お勧めの映画「ニューヨーク公共図書館」を見て来ましたが、完敗でした。中身にはなく、前半は睡魔に負けてしまったのです。前日までの梅仕事の疲れ……いや、機関銃のように繰り出されるセリフについて行けなかったのです。頂いたパンフレットにアメリカ社会を支える民主主義とは何かを伝える」とあり、よくしりと意気込んで行ったのですが、この体たらく。取すかしい限りです。それでも後半は図書館員と利用者達との間で交わされる会話の何と多いことと羨ましく思いな

から見えていました。

工夫された徹底した市民サービスと知への誘導。しかし裏で行われる会議では、どこの図書館も抱えているだろう現代的問題についての真剣な討議が映し出されていました。ホームレスの対応についてまで。

岩波ホールへの行き帰りの電車の中では、例によって老若男女がスマホと向き合っています。たまに静かに本を広げている人を見かけると、「おっ御同輩!!」と声をかけたくなります。本を読まなくなつた、だから出版業界も本屋さんも大変な中にいます。

そんな中で、図書館の果たす役割とは何か？ 私には皆目見当がつかみませんが、だからこうして「おいしい図書館」の様な、市民の意見が反映される図書館を目指して活動する図書館運動の発展を、陰ながら応援しております。

★「ニューヨーク公共図書館、観ました。(7/4、柏キネマ旬報シアター)」

長尺ですが、吸い込まれました。ナレーションが無いのが良い！臨場感がたっぷり。脳が活性化されましたよ。

「図書館」が、これ程多種多様な活動をしている。大いなる発見且つ感動でした。

舞台芸術で、ジェファークソンの独立宣言を「怒り」「懇願」の二つの感情を込めてそれぞれ手話通訳する場面では、通訳者のそのまま演技者のような表現の素晴らしさ！アプロウチの真摯な様。

視聴覚障害者の為の朗読は、言葉を越えて、その素晴らしさが伝わってきます。

黒人関係に特化した分館もあるのを初めて知りました。日本ならば、沖縄やアイヌ民族、在

日朝鮮・中国人の分館になりましょうか。そこに真正面から取り組めるのは、アメリカの懐の深さでしょう。

そして何度も挿入される幹部会議や市民の勉強会、講演会、集会の人々の弁舌。さすが多民族社会で生きて行くための切り札。彼らの違いを思い知らされました。ひとつの典型を見た思いです。

(以上の二つ★は、投稿です。)



中西香澄

学習支援？ Wi-Fi

シーン毎に驚きと疑問の連発でした。何故なら、あまりにも自分の「図書館」という概念からかけ離れていたからです。

そんな図書館に関わるスタッフやボランティアの方々の自由で前向きな姿勢に公共図書館の持つ魅力を感じながら、何が日本と、ま

た松戸と違ふのだらうとずっと考
えていました。

そして、その答えは「民主主義」
だと思いました。

イベントのスピーカーである学
識経験者から一利用者の住民まで、
様々な登場人物が何度も何度も「民
主主義」と口にするのです。

取り上げられていた企画、運営
の全てに「民主主義の実現」が大
きな目的として常に有る事が伝わ
って来ました。「民主主義」とい
う言葉があまりに当然に、頻繁に、
そして大切に発せられていました。
今日、子ども達との会話でどの
くらい「民主主義」を使っただろ
うかと、つい自分自身に問いかけ
ました。それだけ、自分の生活に
も浸透していかないのだということ
に恥ずかしくなっていました。
王政国家では、全ては君主の為
に行われるのでしよう。

一方、民主主義の国では、「民

主主義」の為に物事が行われてい
るはずなのです。

けれども、日本の私たちにと
ってあまりにも「民主主義」を
語る事が遠く、生活に密着して
いません。生活の中に「民主主
義」を考える機会を増やしてい
く事から、住民と地域、基礎自
治体、国との関わりが変わって
いくのではないのだろうか。

そして、民主主義と情報は切
離すことができません。情報
を得る事ができる、発信される

図書館の在り方からも「民主主
義」を先に進める事もできます。

押し付ける事も強制する事も
できない、一人一人が自らの「民
主主義」の種を育てなければ実
現する事はできません。その成
長に、身近な場所で力強くサポ
ートし栄養を与えてくれるのか

図書館であるにも拘わらず、そ
の価値に私を含めて気付いてい

ない人が沢山存在しています。
一人でも多くの人がその価値に
気付くことで「民主主義」を一步
前に進める事ができます。

そして「民主主義」を目指す人
々が集う場所が「民主主義」は実
現されていくと希望を抱くことが
できました。

今ここで民主主義実践の場！



山中啓之

「時に真実は嬉しくないもので
す。私は真実を言っているだけで、
攻撃が目的ではありません。」

「見る側がそう受け取っているだ
け」と、ハッとさせられる様なセ
リフから3時間25分に及ぶこの映
画は始まる。普段から「民主主義」
についてどれほど考えているのか、
まるでリテラシーを試されている
ような先制パンチで、この映画は
始まる。

本館を含む計92の図書館から成る「ニューヨーク公共図書館」が主役。予算の半分以上を民間の寄付で運営し、世界で最も有名ともいえるこの図書館は世界中の図書館員から注目され、観光スポットにもなっている。

しかし目を引いたのは、その重厚で壮麗な佇まいよりも、その敷居の低さであった。司書によるレファレンスは勿論、高齢者のダンス教室や移民に対するパソコン講座、更に就職案内では「自分の長所を3つPRせよ」と、目的に対して積極的に役割を果たす。ここまで来ると、図書館は何でもできるという錯覚に陥りそうだが（もしかしたら、本当にそうなのかもしれない）。

タブーも無い。人種や宗教などの対立も隠さず、スタッフ一丸となつて議論する。人間を常に中心に据えようとする姿勢が貫かれて

いるのだ。ホームレスをどうするか、黒人差別をどう解消するか……放っておくと日陰に追いやりられそうになる事象に対して、日々真剣に、堂々と議論する図書館員や関係者たちの使命感は想像以上に強い。アメリカの源泉は、自由平等に加え、お互いを認め合う行動から来ている。その土台を支えている事こそが、この図書館の持つ真の美しさなのかもしれない。

「人間の本音は時間とお金の使い方に出る」というのが私の持論だ。物質的に豊かな日本に長く生活していると、つい忘れがちになるのが物事の本質である。民衆が互いに大事なことから目を背けて生きている。それが世界をより一層悪くしているのではないだろうか。真実を知ってしまったら、誰かに話したくなるはずだ。自分らしく生き、

ることを推進する人が、図書館の周りには多い。娯楽の暇から覚めたら、お金と時間をかけてでも本質を取り戻したいと願う人々が増える時代の萌芽を感じている。人はいつか、正しいことをしたくなる。人の為と自分の為が一致することをしたくなる。それが、人間が生きるといふ事なのだから。所与の権利の上に胡坐をかいていけば、民主主義は劣化する。闘い続けなければ……というよりも、常に大事な事から目を背けない緊張こそが、民主主義を忘れない要諦だろう。木村友加計問題・米運基地、改憲等の問題で民主主義がいつそりと失われつつある我が国の現状を真剣に考えさせられた時代を超えて鎮座する図書館とは裏腹に、観た者の心中では勢気が止まない。そんな映画である。

